「知らねばならぬこと」　　２０２２年１２月１１日

コリントの信徒への手紙一８：１～１３

佐々木　佐余子

この手紙は、コリントのクリスチャンたちが窮地におちいり、何とかパウロに助けを求めたいと考え質問状をパウロに送り、その答えとして、パウロが送った手紙です。まず７章に「そちらから書いてよこしたことについて言えば」とあります。25 節「未婚の人たちについて、わたしは主の支持をうけてはいませんが」とあり８章「偶像に供えられた肉について言えば」とあります。コリントの教会は今、牧会する使徒がいないので、パウロに指導を求めた形跡がありますね。それにしてもコリントの教会は、誰につくかという分派問題や不品行の問題やまた、食べ物のことで不和があったり戸惑ったり不安になったりこんなにも揺れ動いていたのかと思います。今朝は偶像に供えられた肉を食していいのか、悪いのかでパウロはコリントの迷えるクルスチャンに回答を与えています。この問題を考えるに、まずコリントのクリスチャンがどのような状況で暮らしていたかを知らないとパウロの言っていることが良く呑み込めません。コリントの町はギリシャにあり、狭い海峡を挟んで近くにアテネがあります。アテネと言えば、紀元前の頃からパルテノン神殿が建てられており、人々の信仰を集めていました。その神殿には祭儀の時、たくさんの犠牲のいけにえが奉げられるのです。その多くは祭司の取り分となり、祭司が消費して残った分は市場に出し利益を得ていたのでした。またその神殿内に食堂なる施設があり、人々はそこで食したりしていました。お土産に動物の皮も何かに加工され売られていたかもしれません。

その様な中でクリスチャンは暮らしていたのです。ですからわからないことが多くあったとしても不思議ではありません。神殿の祭儀に行ってもいいのだろうか。市場で売られていたものを買っていいのだろうか、料理して食べてもいいのだろうか。ますます神経質になり、よその家に行って出された物にそのような肉が出されたら食べてもいいのか、また知らないで食べてしまったら罪になるのか等々です。不安が常に付きまとうのです。ユダヤ人が改宗してクリスチャンになった時も、食物のことで迷いました。初代教会は人間にとって一番大事な食肉に対してエルサレム会議をしていました。使徒ペトロが先導して要綱が決められたのです。１つ、偶像に供えられた汚れた肉は食べてはならない。２つ、不品行を慎むこと。３つ、絞め殺した動物の肉と４つ、血を避けることでした。ところが、その使徒会議の後すぐにパウロがコリントの人たちに書簡を送った際に、パウロはコリントのクリスチャンたちに修正条項なる規則を出したのです。そのことが４節です。「そこで、偶像に供えられた肉を食べることについてですが、世の中に偶像の神などはなく、また、唯一の神以外にいかなる神もいないことを、わたしたちは知っています」と書いているのです。けれど、信仰の弱い人をつまずかせないように、偶像に供えた肉は食しない方がいいと、教えたのです。パウロによれば、この世に偶像なる物はなく、この世で唯一の神以外は、どんな神もいないのだとはっきり述べるのです。地上に多くの神々がいても、クリスチャンにとっては、

この世を創造され、主イエスが父と呼ばれた神だけが存在し、すべてのものはこの神に帰って行く、と考えていたのです。日本に生まれた私たち、キリスト者はコリントの人たちと似ている環境に置かれているのではないでしょうか。日本には八百万（やおよろず）の神々がおられるということです。そういう中で伝道するにはやはり、日本の宗教を学んだ方がいいということで、ずっと前になりますが、伊勢神宮に行ってきました。ある夏のとても暑い日でした。日本人の精神的屋台骨になっている神道とは如何なるものか、と思ったのです。行ってみると今から 2000 年前の弥生時代にタイムカプセルに乗って行ったかのようでした。大きな神社の鳥居があってそこには大きな橋があります。その橋を渡ると伊勢神宮に入るようになっていました。鳥居が幾つもあり、神社と藁ぶきの屋根のお宮がありました。まるで国有化されているような伊勢神宮のそばにはカトリック教会、日本基督教団の山田教会がでんと構えていて感動しました。あの伊勢神宮の面前で少しもひるまず伝道している教会です。「キリスト教会も凄いわ」と感じたのです。でもお互い敵愾心を持つのではなく案外仲良くしているのではないかしら、と思いました。異文化共存ですね。長野に諏訪大社という大きな神社がありその神社は色濃くユダヤ教の神殿の模倣があるということです。中には鹿の頭が壁に置かれており、その鹿はアブラハムが息子のイサクを犠牲の動物の代わりに捧げようとした時、神から「待った」がかかり、近くの藪を見たら、一匹の雄羊が藪にかかってもがいていたのをアブラハムが取ってイサクの代わりに捧げたというところから、お宮の中で鹿が置かれたという説があるのです。実際ユダヤ教の祭司が諏訪大社を訪れた時、あまりにエルサレム神殿と状況が似ているので驚いたそうです。諏訪大社の近く、南の方角にモリヤ山があるのです。昔、ユダヤ人が渡来した証拠でしょうか。そのような歴史を知るとワクワクします。7 節ご覧ください。「しかし、この知識がだれにでもあるわけではありません。ある人たちは、今までの偶像になじんできた習慣にとらわれて、肉を食べる際に、それが偶像に供えらえた肉だということが念頭から去らず、良心が弱いために汚されるのです」と言います。先の使徒会議では偶像に供せられた肉は食べてはいけない、というお達しが出されていたので、信徒たちは控えていたけれども、パウロがはっきりと世の中に偶像なる物はないから食べても良いと言われたのです。強い者は平気で下げられた肉を食べるけれど、弱い者はそれを見てつまずく。コリントの町中で行なわれた祭りにはクリスチャンも招かれ、神殿内で、あるクリスチャンは平気で食し、それを見た他のクリスチャンもつられて自分も食してしまった。けれど、弱い信仰のため後から後悔した。「あの時、食べなければ良かった」と思い、自分が汚れたように思うのです。11 節「そうなると、あなたの知識によって、弱い人が滅びてしまいます。その兄弟のためにもキリストが死んでくださったのです」と言います。これはただ食肉の事ではなく、いろいろなことが言えますね。上に立つ人は自分の言動に注意しなさい、ということでしょうか。政治家もそうではないでしょうか。立派な政治家が陰でおかしいことをしていれば、つまずきになります。更にパウロは言います。１２節「このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるのは、キリストに対して罪を犯すことなのです。」と言っています。「知らねばな

らぬこと」 それは最も弱い兄弟姉妹たちを心に思うことではないでしょうか。教会の中で福音から遠い知識をひけらかす人たちが持論を吐き混乱させていました。福音を自由勝手に解釈する知識人たちは信仰の初心者たち、洗礼を受けて間もない人たちをたぶらかし、「偶像は実際世に存在しないから犠牲の肉を食してもいいのだよ」、と言って異教の神殿の下がり物をかまわず食べていました。そのような人たちは確信が持てないで食べない人たちを顧みることはしなかったのです。パウロはそこを見抜き、彼らは「知らねばならぬことを知らない」傲慢な人たちだと批判したのです。愛のない信仰・知識はたとえ、その神学が正しくてもかえって虚しいと説きます。愛が大事であること。本当の知識は自分が何も知らないことだといいます。故に自分は何か知っていると思っている人は本当に知らねばならぬことを知らないのだ、と教えました。

今朝は待降節の時です。そう言えばマリアは本当に謙虚な少女でした。ルカによる福音書１章２６節を学びます。「イエスの誕生が予告される」というところです。天使ガブリエルはガリラヤという田舎町に住んでいる１人の少女に遣わされました。この少女は知らねばならぬことを知っている少女でした。「わたしは主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように」と答えました。この時、マリアが反抗しそんなことは起こるはずはない、と否定したらどうでしょう。マリアはすべて神の示される通りに受け入れたのです。思うに、マリアの心が荒れていたら、とてもこのような言葉は出なかったと思います。このことはマリアが本当に愛の人だからではないでしょうか。マリアは、神は愛のお方であることを知っており、故に受容出来たのです。マリアは神に賛歌を捧げました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者というでしょう……」この賛歌はマグニフィカートと言われ、このマリアの信仰告白は現代の私たちにも引き継がれ勇気を与えています。次に洗礼者ヨハネのお話です。マリアは身重の体で親戚であるエリサベトの家を訪れました。エリサベトも身重だったのです。エリサベトの夫は祭司であったにもかかわらず、天使ガブリエルの言葉を信じなかったので口がきけなくなりました。けれど、月が満ちてエリサベトが男の子を生んだので名前を名付ける時、父親は板に「この子の名はヨハネ」と書いたのでザカリアは舌がほどけて神を賛美したのです。ザカリアはこのように予言しました。ザカリアの預言「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、僕ダビデの家から起こされた。昔から聖なる預言者たちの口を通して語られた通りに、」この預言はベネディクトスの預言と言われています。「イスラエルの神である主は、過去において、その民を顧み贖いを成してくださった方です。神は決してご自身の民を見捨てることなく、彼らを顧み、エジプトから、あるいはバビロンから救い出されました」とザカリアは歌っています。ザカリアの息子ヨハネは自分の栄光ある地位を捨て、来るイエスの備えの道となりました。父親ザカリアはどんな気持ちでいたでしょう。本来

ならば祭司職を継いでもらいたいと願ったでしょうが、キリストの道を整え、その道筋をまっすぐにし、谷はすべて埋められデコボコの道は平らにする使命を、神はヨハネに与えられました。そしてヨハネはその使命の道を従順に歩みました。けれど、ヨハネは領主ヘロデを批判したことで無残にも残酷な仕打ちをされました。待降節の折、ヨハネの最後の死を悼みつつ、主を待ち望みたいと思います。